

レポート5月16日 柿原真里絵

石川先生の講義は、私にとっては当講座受講の一番のきっかけだった。

今は医療機関で働くソーシャルワーカーとなったが、以前、仕事をしながら福祉関係の勉強を始めたいと思っていたときは、漠然と児童福祉に興味を抱いていた。

その後、転職し学校に行き直した際には、慢性疾患を抱える身となっていた。まだ社会の中で自分の疾患がどのような位置にあり、対外的にはどう見られるか、感じられるかなどに思いを馳せることはなく、とにかく生きづらさだけを感じる毎日だった。

そして福祉の勉強をする中で、障害学に出会った。興味を覚え、本を読むと、今回の講義でもお話のあったように、「障害とは個人に埋め込まれたものではなく社会との関係の中で生み出されるもの」という考え方に、とても驚き、また共感を覚えた。

専門的には学ぶ機会を得ていないために勝手な印象だが、自分が考えたい内容、思考したい方向性を示されたような感覚があった。そして、ADAや障害者差別禁止法、海外の福祉先進国における障害概念の変化なども調べるに至った。こうしたコペルニクスの概念転換を日本社会において巻き起こすことができないか、ということを考え、今回の受講に至っている。

論拠となる社会学を学ぶことだけでは、人は生活していけない。

石川先生がおっしゃられていたように、障害当事者による技術開発や事業スキームを確立し、経済的自立を目指すことが必要だ。

ボランティアや補助金をあてにしない方向性を模索し続けている現場では、しかし、自立は難しい現状がある。

しかし、動かなければ、何も変わらない。

今回は、当事者だからこそできることをストレンクスとして捉え、その人なりに実践していく姿を見せていただいた。そういえば、知人の聾者は今、盲聾者支援のために勉強を続けている。

では、難病患者ではあるものの内部疾患で外見上は健康な人とさほど変わらず、しかし社会生活を送るうえで生きづらさを感じる自分は、ソーシャルワークの現任者として何ができるか。

ディスアビリティを外部へ知らせる強さ、ストレンクスに変える技術、方法などを先達から教えていただき、知識や経験として自らに蓄積する意義を考えなければ。

ほとんどの人は生涯を終えるまでに何かしらの障害を得ることとなる。

その事実を前提に、日本独自の法整備を望み、訴え、自分なりに行動していかなければ、と改めて感じた。